以色爲名

〔四條流庖丁書〕一箸ノ事、白ハシハ銀ヲ學、赤ハシハ銅ヲ學也、銀ハ毒ヲ消故ニ學之也、赤ガネハ藥ヲ生也、依之學也、

〔雍州府志七土產〕白箸　在四條坊門、箸木者美豆木、或宇利木用之、元出丹波幷若狹、於茲又改斷之、杉箸專用杉、

〔本朝文粹九序〕白箸翁　紀納言

貞觀之末、有一老父、不知何人、亦不得姓名、常遊市中、以賣白箸爲業、時人號曰白箸翁、

以製作爲名

〔梵舜日記〕寛永五年正月三日、善兵衛白箸百膳持來也、

〔大內日記〕寛永十年九月六日、二條殿、九條右大將殿、八條殿、三條前內府四人ハ敷居之內ニ、此四人ヘハ木具ノ臺ニ、御菓子餅ナドスヱテ、白箸添テ、其外ノ衆ハ舖居ノ外ニ祇候、杉原ニ菓子居テ、赤箸添テ、右四人ヘノ御給仕ハ梅園、橋本也、

〔玉露叢十〕寛永十二年正月廿八日、公方樣家光御側ニハ、九寸ニ何ヤラン造花二本ニ、常ノヲコシ炭三ツ四ツ置合、カラスミト杏仁ト置マゼテ、白箸一膳アリ、

〔胸算用一〕長刀はむかし鞘

早極月初に万事を手廻よく仕廻て、割木も二三月までも貯へ、略中塗箸、紀伊國五器、鍋蓋までさらりと新く仕替て、家主殿へ目黑一本、略下

〔萬の文反古一〕世帶の大事は正月仕舞

町內へ例年ぬり箸二膳づゝ、年玉つかひ候へども、是も門々多し、無用に仕るべく候、

〔好色一代男一〕別れは當座拂

祇園細工の足附に、杉板につけて燒きたる魚、お定まりの鮹、漬梅、色著の薑に、塗竹箸を取添へ、

〔諸事留五〕天保十四卯年正月十四日